

この原稿を書いているのは本誌が発行される3週間ほど前なのですが、ここ3カ月ずっと、「3週間前には予想しなかった状況」が進行しています。発行されてから読み直すと、3週間前は何んどのんびりしていたのかと驚愕するのです。本稿が活字になる頃にはさらに事態が進行していると予想されますが、とりあえず、やむを得ず外出する際には、「対人距離を取る」と(ソーシャルディスタンシング)が求められるという状況は続いていると思われまます。

注意して接近を避けていても実際には困難、という場合がありますね。そのために装いが貢献した例があります。例えばベストの時代にベスト医が着用した、例の鳥のくちばしのようなマスクもそうです。くちばし部分に薬草を入れていたそうですが、見た目のおどろおどろしさによって人を寄せ付けないという効果もありました。また、他の感染症においては、罹患した人に鈴が付けられ、歩くと鳴る鈴の音で人を遠ざけたというケースもあります。

目的は異なりますが、15世紀からスペインの宮廷で流行し始めた巨大スカートも、「社会的距離」を取るためのものです。宮廷での地位が高くなればなるほどスカートが巨大化したのですが、そう

することで神秘性と品位を保とうとしたのです。

19世紀のヨーロッパでは中産階級の女性の間でも巨大スカートが流行しますが、クリノリンと呼ばれるフープスカートですが、表向きは、男性から一定の距離を

いファッションにはありません。

19世紀には後ろだけを膨らませるバスルススタイルが流行し、後方からの人の接近を阻みます。膨張スカートの流行が消えた20世紀初頭にも、対人距離キープのためのアイテムは登場します。大きな帽

中野香織  
「ファッション歳時記」  
105

人との距離をとるためのファッション



2020年パレンシアガ春夏コレクションより



クリノリンが描かれた楽譜の表紙。1854年

保ち、貞節を表現するための装いということになっていました。男性が女性の腰に手を回したくともスカートが邪魔して難しい。拒絶しながら誘うという目的を秘めた誘惑装置でもありました。本音と建前を使い分けたヴィクトリアらし

子です。「マイ・フェア・レディ」のオードリー・ヘプバーンの帽子といえはイメージを思い浮かべていただけでしょうか。現在、私たちは命を守るために人との距離を取る工夫を行わねばなりません。実は、2020年春夏モードのテーマは、

「ビッグシルエット」でした。アパレル企業が休業中なので実物を見ることはできませんでしたが、クリノリンを連想させる巨大スカート、フリルを多用して身体の幅を広げる巨大な服、膨張した袖、テント状の頭部の覆いなど、焦点を「対人距離」に置くならば、使えるヒントが満載なのです。

モード界を離れて見回してみると、日傘を差す人が出てきました。傘の範囲内には入れません。海外では、着ぐるみを着たり、動物の被り物をしたりして、「変な人」と見られることで距離を保つ工夫も見られます。平安時代の壺装束(はつらぶ)や市女笠を復活させてもいいし、音を出して人を遠ざけるといいうのもありかもしれません。この際、手段は問わず、なんとしても対人距離を保ち続けましょう。心の距離は密接で。みなさま、どうかご無事でお過ごしください。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。